

于闐文 (Khotanese) 金剛經

歸敬文に就て

伊藤 唯真

(一)

金剛經は成立原語たる梵語のテキストは云ふ迄もなく
藏訳語としての^①漢^②西藏^③蒙古^④滿州^⑤ソブド^⑥それ
に本稿で考察される于闐各語のテキストを有すると云
ふ他にあまり類例の見られぬ豐天性を持つてゐる。そ
の各テキストについての説明は註記にて示す程度に止
めて于闐語テキストについて云ふならば、原本は、
A. Stein に依つて蒐集された数多くのマヌスクリプト
中に含まれ、Choozsa の分類整理番号を付せられて
いる写本であつて、直立ワブリ風の字体をなしてあり
一葉 (260 x 230 mm) 表裏四行づつ寫經され、全体で
四十四葉を算する完本である。此の写本が整理校合研
究されて学界に公表される迄には、Koenle, Konow,
Seemann 各教授の手を経てゐる。即ちこの写本が
蒐集された當時は支離滅裂であつてオ一葉——オ十葉
オ十五葉、オ二十葉——オ三十八葉、オ四十葉、オ四
十二葉、オ四十四葉が Choozsa とされ、残るオ十
一葉——オ十四葉、オ十六葉——オ十九葉、オ四十一

葉、オ四十三葉が Choozsa 00124 として分類されてい
たのを Koenle 教授は同一聖典である事を確認し順
序次を正し、オ三葉裏面——オ十葉裏面、オ三十一
葉表——オ三十三葉表の部分を註記して印写した。^⑦こ
れに基いて Seemann 教授は于闐語についての類案
なる研究の光に依つて研究印刻に付し、^⑧かゝる基礎作
業の上に Konow 教授は全文を梵語に対合比定して
Koenle 教授編する所の Manuscript Remains
of Buddhist Literature found in Eastern
オ一巻に収めた。発見よりわづかに八年を数へるのみ
であつたが、その学積後世の佛教学者を益する事ま
とに大なるものを及ぼしている。吾人亦此等諸學匠に
負はざる所としてないのである。

于闐語テキストの詳細なる内容及び他のテキストへ
の対照研究の結果は他に譲るとして今回は主として
于闐語テキストの特異性の一なる本文前に附せられた
歸敬文を中心としてその重要性を見る事とする。

① 正藏(般若部) Vol. 8. No. 235—237

② 大谷甘珠衛勳同目錄 No. 737 東北目錄 No. 16

③ 橋本清水編訳 蒙古文テキスト、蒙古典籍刊行會刊

東京 1940. Library Institut de France

Baum Schilling.

④ Journal Asiatique 1871 Vol. V—Dec, M.C. de
Hardy.

- ⑤ Die *Sprache* des Britischen Museums in Umschrift und Übersetzung heraus gegeben II Teil, Nachtrag zu den Buddhistischen Texten. 8. 1931.
- ⑥ Journal of Royal Asiatic Society. 1910.
- ⑦ Zur nordarischen Sprache und Literatur, Vorbemerkungen und vier Aufsätze mit Glossar 1912.

(二)

帰敬文は原字本のオ三葉裏面三行目に至る迄の十九行に当るが一行平均四十字のボリヨムを荷っているから相当長文である。詳しく云ふなら実質的帰敬文はオ一葉裏面から始まる。オ一葉表面は種々大小の文字が乱雑に走り書きされているが *Kapa-raja-sutra* の *Kapa-shakti-prajnapara-sadham* の文字の書かれているのが明瞭に見られる。これに依つて本文が始まるオ三葉四行前迄は金剛能断般若経帰敬文である事が知られる。(*Kapa-raja-sutra* についてはふれるに至っていない事を残念とする) 内容より見れば次の如く十一に分けられる。

- I folio 1, b. line 1-3 II folio 1, b. line 3 —
folio 2 a. line 1

- III folio 2 a. line 1 — line 2
IV folio 2, a. line 2 — line 4
V folio 2, a. line 4 — folio 2 b. line 1
VI folio 2, b. line 1 — line 2
VII folio 2, b. line 3 — line 4
VIII folio 2 b. line 4 — folio 3 a. line 2
IX folio 3, a. line 2 — line 3
X folio 3, a. line 4 — folio 3, b. line 1
XI folio 3, b. line 2 — line 3

以上の如く十一に区別せしめる帰敬文の内容を概説する前にこの帰敬文全体に於て金剛経研究に本テキストの存在價值を高めるものとして兼訳テキストのみでは兎角詮議の的となるものを明快に敘述しているものを最初に摘記せねばならぬ。

即ち金剛経自体に關するものとしての(1)三百頌般若である事の明示の經名解題に關する叙述の二点である(1) folio 2, a. line 4 — folio 2, b. line 1の部分で先の区分ではVに該当する部分である。

*Prajñāpāramitā tva kṛtsitā sarvaminā
tayaḥ tvā tṛṇāyā "vāṇī" śivaste eva
na vajracchedāka nāma.*

(この般若波羅密は一切智者なる佛に合しこの三百頌を語り説示する時金剛断割と名づく)

とあつて三百頌 *triaticka* に當る *thraya* が出てゐる。この標称は本文にも即ち *folio 44* の *line 1* に金剛断割三百頌般若 *vajracchedika* *Thaya* *paññapāṇṇama* と出てゐる。支那では三百頌として伝へられていたのであるが^①梵藏共に経典それ自体には何等その表徴はなかつた。たゞ翻訳名義大集に於て梵藏共三百頌としてあり^②ゆゑかに經名が汎称か識別されぬままその稱の在つたのを察するのみであつた。

③ *folio 2, 3 line 1-2* に出ず。前述の文に引き続き記されているものであつて四がこれである。

hīnā karaṇa cakkatā u avaranā *taṭṭe*
parhā *vajra māṇḍū* *mbudā* *Thina*
vajracchedika nama.

(金剛に等しき全ての業と障礙とを断する故に)

vajracchedika と名づく)

先に「金剛断割と名づく」とあつたがその經典名命の理由である。右末より金剛の解釈に、般若を以て金剛とする解釈が多かつたのである。経題に關する考察は此處を詳しく爲し得ない爲め他日を待つ事とするがこのウテン文テキストと關連して注意すべき事は梵藏西語に通じた玄奘が「菩薩は分別を以て煩惱となす而して分別の惑の堅きことは金剛に類す。唯此経詮する所の無分別慧乃ち能く除断するを明さんと敘する

が故に能断金剛と云ふ」と唐太宗にのべてゐる。解釈である。單なる漢語の解釈上からではなくはつきりとかかる玄奘の様に金剛とは煩惱なる事を示す解釈に賛すべきである事を示す重要な一文である。

経題に關する最近の研究は経題に三段の發展段階がある事を述べてゐる^④（吾人は少贊成、疑義を有する）がその所論にウテン文テキストが具體的材料を提供した事になる。

① 法宝勘同録目録卷二

② *Mañjushrī*; LXV *Saś-dharma-namaṇi* 49

Triaticka *sum-beyya-ha*

③ 大慈恩寺三藏法師伝、大藏聖教法目録卷

④ 月輪博士「金剛般若經」上巻、龍大紀要一冊

(三)

紙面の許す限りに於て *know* 教の導きの下、他の帰敬文の概略とその特異性について述べる。便宜上前出の区分を用いる。

I …… 三世諸佛三乘の法及び比丘衆増伽にまじころもて三宝に帰命する、(事をのぶ)

II …… 同じ様に世尊の般若救羅密に於て全ゆる波羅密の母なる此の聖典に帰命する、(事をのぶ)

IV …… 菩薩行 (*Paññā* *carā*) 最高禪定に於てえられる諸法の本質 (*adharma* *tiṇṇa*).

paramārtha (jauṇya) 法身 (adharmakāya)
等の語を出している。

V. 前出

IV 諸佛の法は全てこの経 Vajracchedikā

の中に詮じつめられている。それ故にこそ恵みあり慧深のある事をのぶ

III 受持読誦書寫する者は護念される事をのぶ。

II この経の用懐深き人に依つて暗誦される時その福聚は大である事をのぶ。

I それ故に若し仏陀が他に法をどく事が出来る様に護念付嘱して下さるなら、法に守られてまこと心を以て法説せん事をのぶ。

IX 一切の宋尤き菩薩の方への帰敬成就せり。

(と結んでゐる)

以上の如き帰敬文を終つて直ちに経の本文へと続くのである。概観して既に察せられる様に印度における諸論の帰敬偈が殆んど法門の哲學的エッセンスに融れてゐるのに対比して福聚徳護念撰取の面が著しく目立つてゐる。三宝帰依に始り一切諸菩薩への帰敬に終る間に出てくる本経内容に關する形而上的概念用語の成可といへば III IV の中樞語位のみであつて I II の三宝と本経の帰依及び V VI をのぞけば他の全ては今のべた性格のものである。この傾向性格はこの部分のみばかりで

なくウテン文テクスト全体を通じて見られる特徴である。即ち一、二の例をあけるなら本文オニ節の要訳「如来応供正遍知善護念諸菩薩善付嘱諸菩薩」に當る部分がこの節に於ける他は梵文テクストの趣意と異ならないのであるが丁度倍に當るスペースでもつて (folio 7 v. line 2 — folio 8 v. line 2) 二度くりかへして叙述している。更にオ六節の梵譯法門の所では「諸佛は祝福されてゐると悟つたなら祝福されてゐない状態にもとつてはならぬ」として他に見られぬスペースでもつて功德福聚の面を擴張してゐる。などである。この事は本経の問題の後半がウテン文では受持読誦福聚功德の文のみをもつて埋めこいるのとは考へ合すべきであつて蒙古文テクストの場合^③と、支那に於ける受容態^④とも關聯して、これは中世の民族に於ける一つの宗教的哲學的文化の一面を現はしたもので受容相を示している貴重なる素材ではなかるまいか。

① folio 15 v

② 前讀三周説法圖説であつて、古来註釋家論表様々なるも通説として前半は人空を、後半は法空をとるものと云ふ。近來松本文三郎博士の注目すべき所はなり終は所謂前半のみにて後半は異文補遺の異録が本文と混同されたものと云ふ(金剛經と六祖壇經の研究)

③ 藏譯テクストに於て予言福音を意味する「ミ」の音字を用ひてゐる(橋本清、水、家藏經集和合璧、金剛般若波羅密經四の頁參照)

④ 金剛經の註釈書に於て感恩功德傳略記の機は三分の一を占めている事は付に本經の書寫功德のパートを利益的に受容してゐる事を示すものである。

(四)

以上瞥見せし如く經に於て帰敬辭の序する事は身とするに足らず本經にても *namo bhagavatya tanyā prajñāpāramitāya* と有するのであるがかくも讃嘆の帰敬文を有する事は論書に於ては普通であるこの概念を持たされてゐる故に非常に珍と感ずるのである。他に於ける例無きやと云ふに漢學の爲わづかに八十頌般若一品の其一頌の般若帰敬文を見出すにすぎない。①これは智度論十八卷の般若讃嘆偈と強度の等象性を有し羅羅羅跋陀羅の作とさ小てゐる。②内容に至つてはウチン文帰敬文よりは格段の形而上學的内容を含んでゐるものであつて兩者固にはいささかの等象性も有る。他に等象性を求めて金剛經関係内のものを見る。モンゴリアンテキストを見ると、

「佛に歸命し奉る。法に歸命し奉る。僧に歸命し奉る。

印度語に *Anga-vajra-śāhika-prajñā-pāramitā-*

manā-mukha-yama-sūtra 西藏語に *iphoq-*

pa-sa-rak-kyi pha-rol-tu phyin-pa

ndo-ye good-pa shes-tya-in thag-pa

chen-pokī-mdo 蒙古語に、聖金剛を以て斷ず

るもの智の彼岸に到れりと台づく大衆經。一切の佛

と菩薩とに礼拜し奉る」とあるのみにし更に彌勒無著世親功德施造の論書の帰敬文を見るに何ん等閑派を有せず他のテキスト亦等象性の文を有せず此處に于處に金剛經帰敬文は全く于處文独自のものにして翻訳過程に於て于處にて附加され于處佛教者の態度をあらはしたものと考へらるるのである。

① *Aśtaśāhika prajñāpāramitā sūtra*

cy mtra 1922

② 宇井博士 印度哲學研究第一卷 三三頁

③ 橋本晴末 蒙古本、前出三頁及び七頁參照經題の辭教に於てウチンと與るパ

西藏語の辭教と同一なり、ただし蒙古本は「ルン・デルゲ」版等と合し西藏語の

翻訳と考へらる。

④ 正藏 No 1510, Vol 25, P 57a, No 1511, Vol 25, P 81b

Vol 1515, Vol 25, P 87a etc.

飛鳥時代の佛教

——特に其源流と流伝に關して——

伊勢寛順

序

凡そ飛鳥時代に於ける佛教は聖德太子に元づくもの